

自我没却をした生き方

— あるモラロジアンの事例から探る —

御法川 誠次郎

目次

- 一 自我没却とは
- 二 問題状況
- 三 指導の内容
- 四 そのときの精神
- 五 Sさんの努力のプロセス
- 六 その後の経過
- 七 考察

一 自我没却とは

①「自我の没却とは、自己の不完全なる先天的及び後天的原因に基づくところの自己の精神を棄却して、神（本体）の本性すなわち自然の法則に適合するように改心することをいうのです。すなわち宗教語をもつていえば、自己の解脱にあたり、もしくは自己の救済されることに当たるのです」（廣池千九郎『道徳科学の論文』第七冊一九二頁）

②「自我 (Egoism) とは人間の自己保存の本能のことであります。この本能が人間の精神の中に存在しておいて、それが利己的に働いておつては最高道徳がその人の精神に入りこむことができぬのであります。そこでこの本能を取り去ることが最高道徳を実行する基礎になるのであります」(廣池千九郎『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』一六三頁)

③「モラロジーにていわゆる自我没却は、単に直接に人間の物質欲を没却するというごとき幼稚な教説ではなくして精神的であつて、支那聖人のいわゆる「意なく必なく固なく我なし」で、自己の利己的な思想、信仰、意見、主義、及び主張を棄てて、神の精神たる至誠及び慈悲になることであります」(『広池千九郎博士資料集十四』一二六頁)

二 問題状況

ここでは、ある鍼灸師Sさんの体験を一つの事例として見ていく。Sさんは、親の跡を受けて治療師になり、親の治療院を継ぐのだが、それまで病気の親に代わつて治療院を守つてくれた義兄と姉夫妻が独立するとうきときに危機と混乱に襲われた。そのときにモラロジーに基づく指導を受け、全く自分の欲を棄てて対処することができたという体験である。

昭和六十一年八月十日は、それまでSさんの治療院の中心となつて支えてくれていた義兄とその妻で

ありSさんの実の姉(次姉)が独立を予定していた日であった。前年から準備をはじめ、昭和六十一年の正月には、正式に治療院から独立を認められ、具体的な準備に追われていた。そのめでたくも喜ばしい日になるはずだったが、急転直下、混乱と対立の渦に巻き込まれていったのは、義兄夫婦がSさんの治療院から歩いて二三分という近さの義兄の自宅で開業すると言ひ始めてからだだった。

(一) 昭和六十一年当時の治療院の状況

父親は当時八十歳だったが、昭和四十九年に病気で倒れてから、ほぼ寝たきりの状態になっていた。特に、考えていることを口では表現し難くなつており、母親が代弁するという状況だった。いちおう、父親が治療院の代表ではあったが、大きく決定しなくてはならないことは母親に相談するという常態であった。両親ともに治療師であったが、すでに治療には立っていなかった。

治療の前面に立つて責任をもっていたのが義兄であった。治療院のシステムは、チームもしくは一人で患者を引き受けるようになっていた。その治療チーム(個人)につく患者は、そのチームが責任をもつて治療していく。新規の患者を、割り当てていくのが責任者の義兄の役割りであった。いくつかのチームがバランスよく治療していけるように新規の患者を割り振つて、各治療チームが同程度の患者をこなせるように配慮していた。

昭和六十一年当時、治療院には五人の治療師が働いていた。義兄、義兄の妻である姉(次姉)、Sさん、A弟子、B弟子であった。B弟子は、長姉の子息でありSさんの甥っ子になる。遠くに嫁いだ長姉

も治療師であったが、すでに亡くなっていた。その長姉の志を継ぐためにB弟子は、母親の実家であるSさんの治療院に修業に来ていたのである。

Sさんの治療院では、だいたい五年くらいの治療経験をもつまでは、先輩と組んでの治療を行なって技術を磨いていく。そして、五年ほどの経験を積むと、一人で治療をするようになる。昭和五十九年には、それまで義兄と組んで治療をしていたB弟子が独り立ちをするようになった。その結果、義兄とA弟子がチームを組み、次姉、Sさん、B弟子の三人は一人で患者の治療に当たるようになった。

独り立ちをしたばかりの治療師のところは常連の患者が少ないので、新規の患者を回すことになる。普通ならば、新規で来院した患者がその治療者の常連客になっていき、独り立ちをした治療者も、たくさん患者の治療するようになっていく。その予約状況を見て、その後の新規の患者をまた全員に割り振っていくというようになるはずであった。

ところが、独り立ちをしたB弟子の所に新規の客をつけても、なぜか分からないのだが常連客にはなかなかならなかった。患者が少ないので新規の患者を回すが、B弟子の治療を受けた患者が再来院する率が上がってこない。そのため、B弟子の患者はいつも少な目になっている。新規の患者はB弟子のところはかなり散ってしまったので、治療院全体としての患者数も減少していった。義兄は約一年間じつと見守っていたが、このままでは治療院の経営が苦しくなると考え、またB弟子のレベルアップを考えて、昭和六十年になってSさんに相談に来た。

もう一度、B弟子を誰かと組ませることが良策だと考えた義兄は、その指導者としてSさんがふさわしいと考えたのだった。「B弟子とチームを組んでくれないか」という申し出を受けたSさんは、B弟子と話し合ってみた。すると、B弟子は、「Sさんのところに弟子入りしたのだから、Sさんのためなら何でもしたい。いっしょに治療できるのなら最高の幸せである」と言うのだ。そこで、義兄とA弟子のチーム、SさんとB弟子のチーム、姉一人という三つの治療体制に変更した。すると、このチーム体制にする決めた翌日から、何の宣伝もしていないのに、新規の患者がどっと増えてきたのだ。そして、Sさんペアのところに来た患者は常連になっていったので、すぐに、一日十七〜十八人を治療するまでに増えていった。

そんな五人での治療体制の中で安定してきた治療院の姿を見て、義兄と姉が独立することを決意し始めた。もともと、この治療院はSさんが継ぎ、義兄たちは独立して出て行く予定だったのであるが、その時期がころあいだと感じたのであろう。独立の話が進む中、A弟子も独立したいということになったが、A弟子もいつかは独立する予定で修行に来ていたわけで、Sさんの治療院の近くで開業するわけでもないで、今までの弟子が独立していったように何の問題もなく進んでいった。

しかし、残された二人にとっては、今まで五人で行なってきた治療院の仕事を二人でこなしていかなければならないという状況に陥ったのである。五人の働きで成り立っていた治療院が、たった二人の働きで維持できるであろうか、不安は高まるばかりだった。

(二) 義兄の入門時の約束

さて、少し話を戻して振り返っておきたいことがある。Sさんの治療院は、父親が昭和二十三年に設立した。父親は再婚した妻（鍼灸師）との間に、三姉妹とSさんをもうけた。末っ子のSさんは父親が四十八歳のときの子どもであった。早くから後継者になることを期待されていたSさんは、高校を卒業した後、鍼灸学校に入り、鍼灸学校を卒業すると同時に、カイロプラテックの勉強のためにアメリカに留学する予定だった。ところが、留学に出発する直前の昭和四十九年二月に父親が倒れたのである。Sさんは、がたがたし始めた治療院のために、アメリカ留学を断念し、父親の治療院で働くようになった。そして、鍼灸師となって十一年目に、義兄夫婦の独立の話が出てきたのである。十一年間の経験とは、鍼灸師にとってはまだ駆け出しの部類である。

その十一年の間、まだ若かったSさんの治療院を、倒れた父親に代わって守ってくれていたのが義兄と姉であったのだ。

その義兄が治療師になるときも確認する必要がある。というのも二十五年前、次姉と交際していたその義兄が、鍼灸師を旨としてSさんの治療院に弟子入りしたいと門を叩いたときに、Sさんの両親はともに反対した。その理由は二つあった。一つは、彼がSさんの家の近く、それも歩いて二〜三分のところに家を持っている人であったからだ。つまり、母親は、将来義兄が独立するときに、当然のことながら自宅で開業しようとするであろう。そうになると、あまりに近くに、同じような技術をもった治療院が



できることになり、Sさんの代のときに、Sさんが苦勞することを見越していたのである。もう一つの原因が、鍼灸・マッサージを全く知らない、高校を卒業したばかりの若者では厳しい修業に耐えられないであろうと思ったのだ。そこで、二つの条件を出した。一年間は外で仕事をしてきて、それでも鍼灸師になりたいという気持ちが続いたら本物であろうから弟子にしよう。そして、独立するときにはSさんの治療院の近くで開業しないこと、という約束の下で弟子入りしたのだった。

(三) Sさんの成長

Sさんは、評判の高い両親の治療を肌でほんやりと感じながら成長し、ごく自然なものとして鍼灸学校に進んだ。そして、父親の治療院に勤めるようになったのだが、両親から直接に治療法を教わったことはなかった。母親は、Sさんが高校生ときに眼底出血を起こし、治療の一線からは身を引いていた。そして、Sさんが治療のプロになる直前に父親が倒れてしまったのである。

Sさんが治療院に勤め始めたときには、次姉夫婦、三姉夫婦、そして二人の弟子がいた。経験豊かな次姉の夫が治療院の実質的な中心になっていて、治療院は順調に繁盛していた。

Sさんは仕事を始めた二年後の昭和五十一年に結婚し、落ち着いた生活をしてきた。ところが、昭和五十一年に家庭生活で苦勞していた長姉が急死したのである。そのショックもあって、糖尿病で闘病生活をしてきた三姉の具合が悪くなっていった。前後して、夫婦仲が良いと思っていた三姉の夫が他の

女性と駆け落ちしていったのである。結局、三姉は元気を取り戻すことなく、昭和五十七年に他界した。二人の姉を続けて失ったSさんは、いったい何のために生きているのかという人生に対する疑問、空虚感、絶望感にとらわれていった。そして、ほぼ一年間にわたって、落ち込んでいた。一応、仕事はしているが、身に入らないという感じは否めず、何しろ、人と会うのが億劫であった。生きている意味がわからなかったのである。

そんな苦悩の中から人生の意味を見い出させてくれたのがモラロジィだった。モラロジィという学問を学んでいたSさんに、モラロジィと治療の一体化、すなわち患者さんの幸せを祈りながら治療することが大事であること、他人の幸せを願って生きる日々こそ人として生まれた意味があることをある先輩が指導してくれたのである。Sさんは、その一言でモヤモヤが晴れ、治療に取り組む意味を発見して、意欲を持って仕事をするようになったのである。

治療に意味を見出し、努力していたSさんがさらに成長する機会が与えられた。それが、甥っ子のB弟子の面倒を見るようになったことである。それまでは、治療時間の四十五分間の間に、患者の全体の状況を把握して、バランスをとりながら一人で治療していた。ところが、これからは二十五分間の間に、①患者の全体を把握し、②最大のポイントであるところを治療し、③そのあとB弟子にどのように治療してもらうかを伝えなくてはならないのだ。患者さんからの問題を素早く的確に把握する能力と治療の時間を短縮する能力が飛躍的に高まったのである。B弟子とのお互いの信頼関係もあり、ベテラン

の義兄ペアーや姉よりも、多くの患者の治療を受け持つ日も多くなっていったのである。

自分たちと同等、もしくはそれ以上に患者にひいきにされているSさんを見て、義兄夫婦は、もうこれで安心して治療院を譲ることができると考えたのかもしれない。また、自分たちよりも多くの患者をこなすSさんたちに嫉妬を感じた部分もあるのかもしれない。次第に独立への決意を固めていった。

(四) 義兄夫婦の独立準備

昭和六十年の後半になり、多くの患者をこなしているSさんペアーを片目に、姉夫婦は母親に独立の話を持ち出し、独立の準備を始めていった。そして、昭和六十一年の正月には、治療院として正式に独立の話を承認した。

これからは、五人で切り盛りしていた治療院を、二人で支えていかなければならなくなったSさんにとって不安は大きかったが、今まで二十五年間支えてくれた義兄夫婦への感謝の気持ちで、喜んで見送らなければならぬと考えた。義兄夫婦は開業する場所を探していたが、患者のリストで、義兄夫婦が担当している患者へは開業の案内を出そうということまで話し合っていた。

ところが三月になって、義兄夫婦は急に、店を借りて開業するためには一〇〇万円以上かかり、その後の家賃などを考えていくと、とても経営していけないので、自宅で開業すると言い出した。それを聞いて、Sさんは「えっ、まさか!」と思った。万が一にもそういうことがないはずだと思い込ませて

いた自分の不安な気持ちが現実になってしまい、そんなことをする人たちではないという信頼感が崩れ、こんなことが起きるなんて一体どうなっているのだという困惑がむくむくと大きくなっていった。最初は困惑していた母親だったが、しだいに激しく怒り出した。母親としては、万が一にもそんなことの無いようにと、何度も念を押し、確認してきたことを、最後の最後で義兄から裏切られてしまったと感じたのであろう。

Sさんも、驚き・困惑から怒りへとしだいに変化していった。何しろ、Sさんのペアーは一日十七〜十八人の治療を行っていたが、五人で支えていた治療院をこれからは二人で支えなければならぬのだ。最低でも二十一人くらい来てくれないと治療院の経営が成り立たないと計算していた。もし、経験豊かな義兄夫婦が近くで開業したら、そちらに患者がほとんど流れていくに違いない。最低でも二〜三割は減って十四〜十五人になってしまいうだろう、下手したら半分くらいになってしまふのではないかとしか思えなかった。経営を成り立たせる最低線より、はるかに低い数字しか出ないことは間違いないだろう。ということは、治療院は成り立たなくなってしまうかもしれない。今まで育ててもらっておきながら、その治療院をつぶすようなことをするのはなんとひどい人なのだろう。姉も姉だ。自分の実家をつぶすような、恩をあだで返すような人の味方につくとは、何を考えているのだろう、と考えれば考えるほど先行きの不安が大きくなっていった。

そしてその不安はいつしか怒りへと変わっていった。治療院の中は、冷たい空気が流れ、Sさんの口からは、つい相手を非難する言葉が出るようになっていった。しかし、義兄夫婦は、Sさんの挑発にはのってこなかった。Sさんの目には、義兄夫婦が開き直っているのか、独立するまでは仕事だけはちゃんとこなすけれども、その後のことは関係ないといった、ふて腐れた感じで淡々と仕事をこなしているようにしか見えなかった。

Sさんは、商道徳からいっても理不尽な行為だと思い、義兄夫婦がSさんの治療院の近くで開業するのをどうしたらとどまらせることができるか、いろいろな人に相談した。信頼しているモラロジーの先輩たちのところを何度も訪れた。先輩たちは、真剣に話を聞いてはくれるが、具体的にどうしたら解決できるのかは教えてくれなかった。そのためSさんは、本当に自分の気持ちを理解してもらえていないかという疑問すら感じ始めた。Sさんは気持ちの整理もできないし、具体的な対応も見出すことはできない日々が続く、辛く、苦しかった。

そんなイライラが募っていたころ、先輩が、モラロジーの本部の先生に指導を受けてみたらどうかと提案してくれた。このままではどうしようもないと感じていたSさんは、本部のU先生の指導を受けることにした。先輩は、U先生に連絡を取り、Sさんの状況を説明して、相談にうかがう日時を決定してくれた。

三 指導の内容

七月のある日、モラロジーの先輩に連れられ、母親、妻とともにSさんは本部に行き、以前から親交

のあったU先生の指導を受けた。Sさんは、指導を受けに行くときの気持ちを次のように述べている。今回は、母親と妻とともに来たが、悪いのは義兄夫婦なのだから、今日はこちらの言い分を聞いてくれるだけだろう。そして、日を改めて義兄夫婦も一緒に呼んで調停してくれるに違いない。いったいどのような調停してくれるのだろうか、楽しみだし、不安だ。でも、どんな内容の調停であっても、U先生の指導に従おう。

U先生にはすでに状況を前もって先輩のほうから伝えてはいるが、どのようなことから詳しく事情を聞いてくれるのかとSさんは待っていた。すると、U先生は席につくなり、「Sくん、何歳になった？」と言うのである。何を聞かれるのかよくわからないままに、思わず、「はい、三十二です」と答えると、「そうか、三十二になったか。……それじゃあ、最高道徳を実行しようか」という言葉が続いた。一瞬何を言われているのかわからなかったSさんだが、U先生の言葉はさらに続いた。「最高道徳というのはい、相手の立場になって、相手の良いようにすることだぞ」と言う。そういう心になれば良策が湧き出ると指導され、Sさんは心の底から納得したわけではないが、U先生の言うとおりにやってみたらどうなるのだろうか、試してみたいという気持ちで、「はい、分かりました。帰りましたらそのようにさせていただきます」と、答えていた。

その日、本部から帰って、モラロジの先輩が同席してくれている場で義兄夫婦と懇談し、義兄夫婦の自宅での開業を認め、表面上の問題は解決した。

四 そのときの精神

U先生は、以前からSさんの治療院にときどき来院しており、そのときには両親が治療していた。Sさんも、中学生のころから顔見知りであったし、Sさんが麗澤高校で学んでいるときには大変お世話になっていた。それらの出会いから、SさんはU先生のことを、とても温かい人で、何でも話せる、好ましい人と感じていた。それだから、モラロジの先輩に、「本部で、Sさんが話せる人はだれですか？」と聞かれたとき、躊躇なくU先生の名前をあげたのだった。

U先生から、「最高道徳を実行しようか」といわれたとき、Sさんは戸惑った。何を言われているのか分からないながらも、ここは話を聞いてくれる場ではないのだ、調停してくれる場ではないのだ、ということが分かった。そして、それまでのSさんにとっての最高道徳とは、正しいことを貫き通すために調停してくれるものだと思っていたのだが、どうやらそうではないらしいということが分かった。では、いったい最高道徳とはどういうことをするものなのか、相手の良いようにというのは、悪人に対してもそれを認めることなのか、など分かっていることとはあった。しかし、U先生の言うとおりにやってみようという気持ちにすでにになっていた。普通に考えたら、自分の治療院がどうなるか不安だから、このような騒ぎになっているのだが、U先生の言うとおりにやってみたらどうなるのかを見てみたいという気持ちになっていたのだ。

だが、具体的に相手の良いようにというのは何なのだろうか。義兄夫婦が自宅で開業したいといっ

いるのだから、それを許してあげればいいのか。そうか、そういう世界があるのだ、どんなことがあっても、相手を責めないという世界があるのだ、という感じであったという。絶対に自分のほうが正しいという気持ちで、相手を責める主張をしてきたが、それでは埒があかなかった。そうではなくて、例え間違っている相手でも(自分ではそう思っている)、相手の言うことを聞いて、そのとおりしていくということが最高道徳なのだ、という驚きがあった。そして、もし義兄夫婦が近くで開業することを認めたら、治療院は成り立たなくなるかもしれない。でも、つぶれると決まったわけでもないし、普通だつたらつぶれると考えられるような状況が、最高道徳では一体どうなるのだろうか、という関心が湧いてきていた。

U先生の指導を受けて、それまで信頼する先輩たちに相談しながら満足感を感じられず、気が晴れずに苦しんでいたSさんの気持ちが、大きく変化していた。なぜか、U先生のことばがからだの中にスーッと入ってきた感じなのである。そして、どんなことがあってもすべて相手の良いように対処しようと思いついて帰ってきた。

当然、帰ってからのその日の義兄夫婦との話し合いはスムーズに進んだ。そして、翌日からの義兄夫婦は晴ればれと仕事を始めた。その熱意が患者に伝わっていったのだろうか、義兄ペアーも、姉も、そしてSさんペアーも、患者がひっきりなしに埋まり、毎日20人くらいの患者の治療を三つの治療体制がともにこなしていたのである。

五 Sさんの努力のプロセス

すべてが、順調に進んでいったように見えるが、人の心はそう簡単には治まらない。

表面上には解決し、全員が仕事に前向きになり、患者の数も増えていったときでも、Sさんの心の中には義兄夫婦の幸福を願う気持ちもあるが、他方では「なんだ、やればできるじゃないか。やはり、今までは手抜きをしていたんだな」「このくらいちゃんとやれば、最初から問題なんか起きなかっただろうに……」「そうやってがんばって、少しでも多くの患者を自分のところへもっていく気だな」という気持ちがいつしか湧いてきているのだった。何をしても、相手を責める気持ちが湧いてくるのだった。

それでも、表面上は大過なく、義兄夫婦の独立の日を迎えた。心の奥底の一部分はさておき、独立していく人たちの良いように、最大限の努力はしたので、すべて順調に進んだのであろう。

そして、治療師が五人から二人に激減した治療院になったのだが、あれだけ大きな不安を感じ、心配していたにもかかわらず、お客さんは減らなかつたのである。かえって増えていった。そのため、Sさんの妻まで動員して、夜の八時ごろまでがんばり、目いっぱい働いた。もちろん、それまで五人で支えていた治療院を少ない人数で治療しているのだから、治療院としての収入は大幅に減っていた。しかし、少人数でもやっていけるのだ、という驚きと安心感が生じた。

Sさんたち三人は無理をして、朝から夜まで働き詰めに働いた。それは肉体的だけではなく、精神的

にも無理をしていたのだ。義兄夫婦に負けたくない、こちらが本家なのだから少しでもこちらのほうが勝っていなければ格好がつかない、という思いもあった。そのため、最近来なくなった患者のことがふつと気になる。あの人は、向こうの治療院に行っているのだろうか。どんなに忙しく治療しているときでも、ふつと「向こうはどのくらいやっているんだろう」と気になる。負けたくないという思いも強かったので、受け入れられるだけの患者さんを受け入れた。

しかし、秋も過ぎるころになって、とても体が持たないことに気がついた。そこで、どんなことがあっても、最大二十人以上は受け入れないことを決心した。それでも、それ以前からみれば、治療する患者の数は多くなっていた。Sさんは、一生懸命、必死になってやらないと患者は来ないと思いついてきた。まだまだ、経験も少なく、技術もない自分には、真剣になって患者の治療に向かうしかないと考えていた。つねに全力投球だからとても疲れた。疲れたが、向こうに負けたくないという気持ちで励みになってがんばっていた。

月日を重ねるに従い、治療院が成り立っていくことがしだいに分かってきて、安心感が出てきた。U先生の指導のとおりをやってみて、結果は順調に進んでいるのだ。しかし、Sさんは疲れていた。また、最高道徳というのは、とても魅力を持っているように改めて考えていた。自分が今まで学んでいたと思っていたのは、最高道徳とは違うということも分かっていった。そこで、改めて最高道徳を学びなおしたいと翌年（昭和六十二年）の五月に、モラロジーの講座を受けることにした。

講座を受けてみて分かったことは、二つに要約できる。ひとつは、自分にとって嫌なことが起きたときに、それを歪曲して受け止め、相手を責めるというパターンに自分は陥りやすいということだった。もうひとつは、どんなことでも自分の問題として受け止めていくことが大切なのだということだった。この二つは、どちらも自分のことが良くわかっていないという点が共通している。事実をそのままに受け止めるために、また歪曲しがちな自分をチェックするためには、そしてどんなことが起きたときでも自分が責任を持って対処するためには、自分を知ることが必要だ。では、どうやって自分を知ればよいのかと悩んでいる時に、「感謝帳」をつけることを教えてもらった。毎日、一日を振り返って、こんなことをしてもらったという感謝の出来事を三つずつ書き出していくのだ。

早速、感謝帳をつけ始めたSさんだったが、夜になって一日を振り返り、いざ書こうとすると書けない。してもらっていることがたくさんあるはずなのに、思い出せないのだ。不足、不満の気持ちはすぐに、いくらでも思い出すのだが、感謝したことは出てこない。最初のころは、「妻が食事を作ってくれた」というように、具体的にやってもらった形の部分にしか気がつくことができなかった。それでも毎日重ねているうちに、しだいに、ちよつとしたお土産を持ってきてくれた義父母の温かい気持ちに気づくことができるようになった。というように、人の心へも気が向くようになっていったという。

そのように自分の心を振り返る日々の努力を積み重ねているうちに、自分の心の中がどれだけでもろしたものであったのかというところに気がつくことができた。義兄に対しても、姉に対しても、それほど多くの不満を感じていないかと思っていたがとんでもなかった。とても厳しく責めている自分に気がつ

くことができた。人様を大切にしたい人間になりたいと考えていたが、今の自分は一日のうちそれこそ一秒くらいしか、人を大切にしたい気持ちをもてていないことが分かったという。

六 その後の経過

そんな醜い自分を自覚できたことによって、姉と義兄に対する不満、怒りの気持ちはしだいに和らいでいった。何よりも、治療院が成り立っていきけるのだという安心感が、Sさんの気持ちを安定させていた面も大きい。

そのようなとき、Sさんの心を決定的に変化させる出来事があった。それは父親の一周忌のときだったが、父親が親しくしていた父の従兄弟に会ったことだった。彼は、父親にSさんのことを頼まれていたのであろうか、Sさんと呼んで、ある造り酒屋の話をしてくれた。その造り酒屋の一番弟子が独立をすることになったが、当時の造り酒屋は製造量の限定があった。そこで、その造り酒屋の当主は、自分のところの製造量を減らして、その一番弟子のところでもその分を作れるようにした、というのである。それを聞いたSさんは涙が止まらなかった。Sさんは、その話に深く感動したし、また、自分が心の底からはその造り酒屋の当主のようにはできなかったことを恥ずかしくも、悔しくも感じた。さらに、その話をしてくれた従兄弟はつねづね、モラロジーに対して「温かさが無い」と批判していたのだった。モラロジーを知らない人でも最高道徳を本当に実行している人がいるし、モラロジーに批判的な目を向けていても最高道徳の実質を教えてくれる人もいるのだと敬服したのだった。そして、その話を聞いて

からは、心より義兄夫婦の幸せを祈れるようになったという。

その義兄夫婦の治療院は、当初はSさんの治療院と同じように大繁盛だった。しかし、半年後の正月、働きすぎの無理がたたったのだろうか、義兄夫婦は5日間寝込んでしまった。そして、これではからだを持たないし、何のために働いているのか分からないということで、指圧治療を止めて、治療師にとつてからだの負担の少ない針治療だけに専念することにした。しかし、針治療だけに切り替えてみるところ、お客さんの数が激減してしまった。これでは生活が成り立たないと、再び指圧を始めると患者さんが増える。増えることからだがしんどくなる、ということではいろいろと試行錯誤しながら、患者の数も大小の波を作りながら、それでも自分たちの治療スタイルを確立していき、地道に継続しているという。

話が前後してしまったが、義兄夫婦が独立した二年後に父親が亡くなり、平成三年には母親も亡くなった。そして、Sさんは古くなった治療院の建物を全面的に改築した。B弟子は、この困難と波乱の期間ずっとSさんの傍らにいて、Sさんを支えてくれた。一〇年間の修行という当初の約束であったにもかかわらず、治療院の改装、そして母親の一周忌が済むまで支えてくれ、結局十三年間勤めて独立していったのである。そんなB弟子の地道な努力が報われたのであろうか、地元に戻り開業したB弟子の治療院も確かな治療技術と人柄が評判をよび、しだいに毎日多くの患者が来院するようになっていった。また、SさんとB弟子の関係は、地理的な遠さにもかかわらず、今でも何かと話し合い、信頼し合っており、

心理的な距離の近さを示している。

Sさんの治療院は、現在、二人の弟子を抱えている。不況の影響を多少は受けながらも、相変わらず盛況をみせ順調に治療院の経営がすすめられている。

七 考察

Sさんの体験をつぶさに見てきたわけだが、「自我没却」という視点からこの体験を振りかえり、自我没却とはどういうものなのか、どうしたら自我没却の実行ができるものなのかについて考察していこう。

(一) 調停を超える

「自己の利己的な思想、信仰、意見、主義および主張を捨てて、神の精神たる至誠および慈悲になること」(一—③)と、本論の最初に挙げた資料である『論文』には書かれている。多分、「自己の利己的な思想、信仰、意見、主義および主張を捨てて」というのは、自我没却を考えるとときに多くの人が常に意識しているのではないだろうか。

その後に続く文章の解釈である。「至誠および慈悲になる」と書かれているのだが、その意味は、自分と相手と、そして第三者にとって良い状態である「三方良し」を実現することと思われる。実は、結果として三方良しになることが望まれていると考えられるが、問題は具体的にどのような行動を取ればすべての人が満足する結果が導き出されるのかということではなからうか。

U先生は、「最高道徳とは、相手の立場になって、相手の良いようにすることだ」と述べた。端的に、自分のことは考えるな、相手の良いようにしろということだ。

それまでのSさんは、正義のレベルで善悪の是非を考え、調停することが最高道徳の方法だと考えていた。しかし、信頼する先輩たちに相談しても調停できる可能性がSさんには見えてこなかった。最後の頼みの綱として、本部のU先生に調停してもらおうとしたのである。

調停とは、相手と自分にとってともに良いと考えるところを探し出すことである。うまくいった場合には、「三方良し」が実現されると考えられる。

お互いが満足するような調停が可能になるには、お互いが考えていることをすべて話し合えること、そして相手を尊重し合えることという信頼関係が築けなければ難しい。さらに、言い分の違う相手を認め合って、お互いが満足できる調停案を考え出す創造的な知恵が必要なのである。それほど難しいがゆえに、当事者の片方もしくは双方が不満を抱いた「妥協」で終わることが普通だといえよう。実はそれでも、妥協できるというのは、まだましなほうなのだ。お互いが話し合う最低限の土壌が築かれているから、多少偏っていても、不満足であっても、妥協ができるわけである。

ところが、ときにはお互いの主張が真っ向から激突して、話し合いの場すらできないことがある。話し合いの場が持てないのは、あまりに理不尽だとお互いが考えている状況だからであろう。その状況は、誰が見ても社会的不正義だと考える場合と、社会的に不正義とは言えないが道徳的レベルでは問題だという場合がある。社会的不正義の場合には、時には法的手段に訴える必要がある。

さて、今回の事例の場合は、道徳的には不誠実ではあるが、社会的不正義として法に訴えるほどのものではない、しかしお互いの死活問題であるし、非常に身近な人間関係において生じたという状況での葛藤場面であった。今後はこの相手と関係を持たないほうが良いという前提で調停するのであれば、また別の結論が導き出されたかもしれないが、今回のケースは兄弟のことであり、できることならばその後の関係を良好なものにしたいという状況であった。

お互いが自分の主張を話すのは、お互いが何を求めているのかを理解することと、どこに最大の衝突点があるのかを確認する意味がある。今回は、すでにそのレベルは十分に行なわれていたと考えられる。最大の焦点は、近くに治療院が二つできたら経営が成り立たないと考えられること。しかし、自宅以外で治療院を開くにはお金がかかり成り立っていかないと考えられること。という両者の相容れないと思われる状況から生じたものだったのである。

このような状況では、正義とか、善悪の是非によって判断しようとしても解決は難しい。気がつかないでレベルから外れてしまったという場合には、外れていることを確認すれば軌道修正できるかもしれない。しかし、それが多少外れていることを承知の上で、自分のところの生活を守るためにやむを得ず取っている行動の場合には、是非を問う立場から何を言っても聞く耳はもたないであろう。

Sさんの「調停」したい、相手の非をとがめたいという思いは、実現しそうもなかった。しかし、正義という面から考えると、ここで負けることは許されないし、なによりも自分たちの生活が成り立たなくなってしまうと思えた。しかし相手は、全く歩み寄る気配も見せないで、「調停」の可能性はないと

思えた。そこで、義兄夫婦でも言うことを聞くかもしれない「力を持った人」による調停を望んだのであろう。それがモラロジの先輩たちであり、さらには本部の先生ということになる。Sさんの葛藤場面解決の方法は、調停であり、その調停を実現させるためには「力のある人」によって可能になると考えていたと思われる。

しかし、U先生の指導は「調停」ではなかった。自分はどうなっても、相手のことを考えなさいという「無の境地」になることだった。それが、結果として「三方良し」になるといっているのである。

(二) 相手の好結果を考える

「自分のことはどうでも良い、相手さえ良ければ」と考えられるならば、何の問題もないと考える人もいるかもしれない。しかし、日常生活において、自分のことを考えるのは大切なことなのだ。Sさんが自分の治療院を守ろうとすることは、親と家庭を守り、子供の将来を守ることなのだ。もし、日常からそんなことはどうでも良いと考えているとしたら、ただの無責任人間に過ぎない。自分の守るべきものを守り守っている人が、究極の立場に置かれたときに、自分を無にして相手のことを考えるところに意味があるのであり、結果として予期できないような展開が生まれるのだ。

結果を期待しないで無心になって努力したときに結果がよかった、という体験をしたことがあるだろう。こうなったらいいなという期待、欲、結果をださなければいけないというプレッシャー、失敗したらどうしようという恐れ、さまざまな思いにとらわれやすいのが人間なのだ。そして、それらの「囚わ

れ」のために自分の実力を出し切れなかったりする。そういう点では、自分の本来の力を発揮するためにも、自分の計らいとか思いを超えて、無心になることの効用があるのだが、ここではそれ以上の意味があると考えられる。

誰が考えても、住宅街で決して交通の便の良いとはいえないところでは、同じような技術の治療院が二つも成り立つとは思えない。また、治療を始めて十一年ほどの若手の治療師のところ、いくら親の代からの信用があったとしても、治療院を支えていた治療師が去ってからのほうがそれまでよりも患者の数が急激に増えるとは考えられない。ところが、その考えられないことが起きてしまったのである。相手の良いようにと考えて行動することによって、結果として自分のところも良くなっていったのである。この人間の普通の考えでは説明のできないことが生じるのが、相手の良いようにと考えて行動したときに多いということは経験的に示されていることでもある。

さてそれでは、同じような状況になった場合、誰でもSさんと同じような行動を取ればうまくいくのかという問いにどう答えられるであろうか？ 相手の良いように考えれば自分のところも好結果がでると知っている、結果を求める気持ちやすいわけで、同じ気持ちになるのは難しいであろう。そういう難しさを除いて考えても、私は同じ結果は出ないかもしれないと考えている。今回のSさんの場合は、治療院の発展という形での好結果が出たが、治療院がつぶれていても不思議ではないと思うのだ。しかし、もし治療院がつぶれたとしたら、SさんならびにSさんの家族にとって他の良い可能性が開かれたのではないかと考えている。Sさんの場合には、治療に才能があったので、治療院が盛況になると

いう結果が出たのであろう。もし治療に才能が大してない人であれば、治療院を閉じて、その人の才能が発揮できる環境が整ったのではないかと考えるのである。

というのも、相手のために真摯に行動する人を見て、周りの人は信頼感を持つのではないだろうか。その具体的な行動を見聞きしていなくても、そのような行動を取れた人の雰囲気はどこか違っていると感じられよう。その人望こそが、その人の人生を切り開いていく最大の力となると考えるからである。そういう点で、最高道德実行の結果というのは、長い目で判断する必要もあると考えている。

念のために、Sさんのその後にふれると、Sさんはその義兄に頼まれて中学校のPTAの会長を引き受けることになる。このことから、あの義兄ならびに周りの人からの信頼ができていことがうかがえる。また、町内会の役員、モラロジー会員の役も多々引き受けて多忙な日々を送っている。もしあのとき自分の立場にしがみついていたとしたら、治療院は安泰であったとしても、周りの人からの信頼がこれほどまでには得られなかったのではないだろうか。

(三) プロセスが自己発見の道

「自分が正しい、相手が悪い」と思い、相手の非を正そうとしていた人が、どんなにすぐれた指導を受けたにしても、急に「すべて相手の良いように」と考える人間に変わるものであろうか。普通に考えれば、人の心は移ろいやすいものであり、短い一度の指導だけで、まるで聖人のような人間に変わるとは考えられない。それでは、Sさんはどうだったのか、どうして劇的な結果が出たのかという疑問が生

じよう。

Sさんは、U先生の指導を受けて、完全に納得したわけではなかったが、U先生の指導どおりにやってみようという決心をした。決心をしたというのは、決してそれまでの人間が「神のような人」とか「悟りを開いた人」に変化したわけではない。それまでの人間が、考え方を改めて、それまでとは異なった行動をとろうとしたというだけである。さらに言えば、それまでの考え方をする要因を持ったまま、違った見方をしていることとしたわけである。そのため、納得した分だけ考え方が変わっているといえるが、納得できていない分だけ不満が湧いてくると想像できよう。

さて、Sさんの場合は、指導された内容の根拠はよく分からないが、自分の考え方の限界は感じていた。そこで、理由はわからないが、U先生を信じ、U先生の言う通りにやってみようと考えた。「相手の良いように」という目標は明確であった。具体的には、義兄夫婦の望むように、Sさんの治療院の近くでの開業を認めてあげ、支援してあげればいいのだ。それ故に、Sさんは具体的行動としてはその通りにした。しかし、その行動をとった心はというと、すなおに義兄夫婦の幸福を願っているときと、恨み、憎しみ、憤りを感じるときがあったのである。

人の心は移ろいやすいものであるから、それを「いつもこうしよう」などとコントロールすることは実に難しいというか、不可能なのかもしれない。U先生の指導は、「相手の良いように考える」という絶対的な命令としてではなく、目標として示されたものなのであろう。そして、具体的な行動というのはコントロールしやすいので、まず「相手の良いように」という行動をとりながら、心の底から相手の良

いようにと望むことができるようになる努力をしていきなさいということだったのではないだろうか。まず行動を取り、その行動にもなう心づかいへと自分を磨いていきなさいということであらう。

Sさんは、行動としては義兄夫婦の良いようにという行動をとり、彼らの独立を支援したので、表面上は円満に進んでいった。しかし、時として憤りや恨みを感じている自分に気がつき、驚いた。その予期せぬ自分の姿に気がついたとき、その自分をどうしたら変えられるのか、成長させていけるのか、義兄夫婦の幸せを心から願えるようになるのかを考えざるを得なかった。その問題意識が、翌年の五月の講座受講へつながったのである。問題意識をもっての勉強は、時として実り多きものになる。Sさんの場合も、このときの講座受講で、自分の醜い心をつぶさに見ていく必要性を痛切に感じ、その自分の心を見ていく決意をし、さらに自分の心を見ていく方法までも教えてもらえたのである。

ここで確認しておきたいのは、最高道徳の実行とは、指導してもらい、その通りにしていけば完成するという、機械的なものとは考えられないということである。行動はある程度コントロールできるので、行動だけを見ていると機械的な印象を受けるかもしれないが、心はコントロールできないので、どうしたら「相手の良いように」なるかと考えるという課題をいただき、そのスタート地点に立ったようなものといえよう。指導された内容の意味を考え、その実現のために自分にとって何が足りないのかを自分で考えて努力していく、その歩みが始められるわけである。到達する目標は明示されているのではあるが、そこへ到達するための方法は自分で工夫していかねばならないのである。そして、その工夫と努力の積み重ねが、自分の心を磨き、成長させていく実際の力なのである。

(四) そのときどきの心遣いが結果を示す

さて、自我没却の実行とは、目標に向かっていくプロセス（過程）を指すことは了解されたと思われる。そして、不思議なことが、そのプロセスにおいても生じるのである。自我没却の実行を誓い、その一歩を踏み出した最大の転機が、U先生の指導を受け、義兄夫婦と和解したときである。そして、その直後から、治療院はかつてないほどの盛況を見せた。

どうしてそのような結果が出たのかは説明がつきづらい。治療師たちの心が晴れ晴れとしたので、治療院の雰囲気が変わったことは想像できる。しかし、その雰囲気の違いが患者数の増加に結びつくためには、普通で考えればかなりの時間がかかりそうなのである。来院した患者が、とてもいい雰囲気だったと友人知人に口コミで伝え、それが広まり、次第に患者が増えていくというのなら、ごく自然な流れであろう。ところが、和解したその翌日からすぐに来院する患者の数が急増しているのである。

また、義兄夫婦が独立し、近くで開業したときも、Sさんの当初の予想では患者数は減るはずだったところが患者数は増え、朝の八時頃から夜遅くまでやっても治療しきれないほどの患者が来たのである。どうして予期せぬことが生じたのであろうか。もし、先代から治療院の中心になっていた弟子が独立して大変だろーうという同情だけで来てくれたのであったら、しばらくしたら患者数は減っていくはずであろう。しかし、患者数は減る気配を見せなかったわけで、同情だけでないことはその盛況が続いていたことからうかがえよう。それでは、どうしてなのだろうか。治療が急に上手になったのだろうか。当時、からだの変調をきたす人が急に増えたのであろうか。

いろいろ考えても、患者になる人の側に要因があるとは思えない。すると、治療院のほうに何らかの要因が求められるのだが、治療院の変化とは、治療者の人数が減ったことくらいである。義兄夫婦の治療にあわなれないと思っていた人が、義兄夫婦がいなくなったので来院するようになった、という理由も考えられるのではあるが、実は義兄夫婦のところも盛況だったのである。Sさんの治療院も、独立した義兄夫婦の治療院も、お互いにそれまでよりも患者数を増やしていたのである。もし、治療院側の要因として考えられるとしたら、危機感があつたにしろ、患者に対しての熱意がより真剣さを増していたということが挙げられかもしれない。しかし、普通であれば、治療院側の要因が患者に伝わり、その成果が出てくるまでには多分に時間がかかると思われる。そういう点で、色々な要因が混在しているのだから、どうして好結果が急にできたのか良くわからない、不思議な出来事である。

そして、このような不思議な出来事が、自分も相手も良いようにと考えたり、患者さん本位で考えたりするときに、生じることが多いのは事実であろう。当事者の心遣いが変化しただけで、予期せぬ結果が導き出されることがある、それもそのときどきの変化に際して如実に示されることがあるようである。その不思議な出来事をどう受け止めるかはよく分からないが、好結果が最高道徳の実行プロセスを励ましているように感じて、さらにプロセスを進める力となっているようである。

(五) 具体的なモデルをもつ強さ

どうやら人は、最高道徳を実行しようとして決意したときから、何らかの良い兆しとか好結果をもらって、

最高道徳を実行していく意欲を高めさせてもらうようなところがあるようだ。そして、意欲が高まっただけでも、ある程度までは努力していけるのであるが、その反面、具体的な努力の方法について戸惑うことも多い。

だいたい、最高道徳の典型的な行動というのは、日常の生活の中にはあまり見られないことが多い。危機的な状況になったときに、一般的、常識的な行為とはかけ離れた行動を取ったとしても、その特異性に後で気がつき、それが最高道徳の実行だったのかと知ることが多いわけである。もし、最高道徳を実行している人の身近にいたとしたら、ふだん感じるのは、心地よさ、温かさ、ゆったりとした感じ、慌てることのなさ、満たされた感じなどではないだろうか。しかし、危機的な状況では、理不尽な相手に反論するのかなと思える状況でも淡々としていたり、そんな相手に対して謝ったり、共感したりする姿を見て驚くことが多いのではないだろうか。

最高道徳の実行というのは、相手と自分、そして自然の法則の流れ、社会の状況と趨勢というさまざまな要因を踏まえて、今この時点でどうすることがもっとも調和が取れるのかと考え出すことであろう。そういう点では、最高道徳を実行しようとする人は、つねに状況を把握し、個と全体の調和を取ることを考え、新たな知恵を発現させようと創造的な営みをしているのであろう。そのような創造的な活動をするために、たくさんの手がかりがあることが望ましい。つまり、具体的な状況でどういう行動をとることが「三方良し」になったのかという具体的な事例をたくさん知っていると、新たな状況のときに創造的に考える手助けになりやすいのである。

さて、Sさんの場合を考えてみよう。義兄夫婦が独立をはたした後のことであるが、形の上では義兄夫婦の独立を支援し、円満な関係を保ってお互いの治療院も順調に進んでいた。しかし、Sさんの心の中には、義兄夫婦の幸福を願う心ばかりではなく、他方では恨みや怒り、不安、競争心が根深く巣くつていて、心の底から義兄夫婦の幸福を願っているとは言い難い状況が続いていた。そんなときに、父親の従兄弟に「造り酒屋の話」を聞いたのであった。Sさんと同じような状況だった人が取った行動であったが、Sさんは最高道徳実行の事跡だと感じた。

造り酒屋の当主が一番弟子の独立のために、自分の作る酒量を減らして弟子のところで作れるように支援したという慈悲にあふれた行動をとったことを知って、Sさんは具体的にどうすることが「相手の良いように」することなのか実感をもって知ることができた。最高道徳実行の具体的な姿を教えてもらえたときに、SさんはそれまでちゃんとU先生の指導の通りにできていたと思っていた自負、それなのに醜い心がでてくる自分をどうしているのか分からない戸惑いを持っていたが、実は自分の行動が外れであったことを理解した。「相手の良いように」しているつもりではあったが、それは全然足りなかったことを痛切に知らされたのである。そんな自分が恥ずかしかったし、中途半端なことしかできなかった申しわけなさいっぱいになった。

そんな素晴らしいモデルに教えられて、自分がどうしていったらよいかを考えられるようになったときから、義兄夫婦に対して抱いていたわだかまりは消えていった。心の底から「義兄夫婦の良いように」することを望めるようになっていったのである。

人は、自分でとっている行動を見ることはできない。やっているつもりだったけれども、実際には違うということが多々ある。スポーツのようにからだの動きに注目する場合には、それが如実に分かる。本人は言われたとおりにやっているつもりなのだが、他の人から見ると違っていることが顕著にわかる。本人は「できているつもり」であっても、実際は違うのだ。それは他人の目で何度も注意してもらおうか、ビデオに撮って自分の姿をチェックして修正していくしかない。

自分の行動については目に見えるのでチェックしやすいが、心については自分でチェックするしかない。そのときに、モデルを知っていることによつて、そのモデルと比べてみることによつてわかることが多い。モデルを持つことは、最高道徳を実行するときの指標として、またチェックするときの指標として、とても有効なのである。

(六) 指導を効果的にする要因

さてここで、Sさんの事例から指導が効果的になった要因について考えてみよう。Sさんの場合に、それまで先輩に相談に行ったときと、U先生に相談に行ったときでは、全く違った結果が出ている。今まで何度も相談に乗ってもらっていた信頼できる先輩のところへ出かけたのであるが、聞いてもらったという満足感も、解決の糸口が見つかる可能性も感じることは少なかった。

この危機以前にもいろいろと相談に乗ってもらっていた先輩たちであるから、Sさんが先輩たちを信頼していたことは疑いようがない。しかし、相容れない両者の立場について第三者として相談を受けて

いるときに、Sさんの立場は理解できても、Sさんの「義兄はひどい。義兄を懲らしめて、止めてほしい」という思いを全面的に理解することはできなかったのではないだろうか。少なくとも、そのSさんの思いを了解したと表明してしまつては、義兄とSさんの関係を崩してしまうことになると考えていたのではなからうか。その先輩の公平な態度が、Sさんには理解してもらえたと満足感を感じさせなかったのではないだろうか。さらに、この両者の葛藤を解決する糸口をSさんに伝える術を持てなかったのかもしれない。少なくとも、かたくなになっているSさんを説得することは難しいと考えたのである。Sさんの気持ちが多量なりとも落ち着き、人の話を聞くことができるようになることを祈りながらSさんの話を聞くだけだったと想像できる。きっと何度も、Sさんが違った見方をできるように視点を提供していたのであろうが、かたくなになつていったSさんの耳には届かなかつたのであろう。

そこで、解決すべき月日は迫ってきていることもあり、先輩たちは本部の先生のところへ行くことを提案した。Sさんは先輩たちに相談していても埒があかないと感じ始めていたこともあり、先輩たちの勧めを受け入れて、U先生のところへ行くことを考えた。先輩はU先生に連絡をとり、場を設定し、Sさんを連れていった。そこで指導されたわけであるが、その指導の特徴を挙げると次のようなことが言えよう。

- ① Sさんの予期せぬ発言から入り、全身の注意を向けさせた。
- ② 考え方の核心をズバリと示した。
- ③ ズバリと伝えても理解してくれないという信頼をSさんに寄せていることを暗に伝えた。

④ Sさんを否定していない。義兄も否定していない。対立の構図を、全く異なった関係にする新しい知恵を示した。

⑤ U先生の言うとおりにやってみたいという気持ちを起こさせた。

ここで特に特徴的なのは、ズバリと伝えていることである。その伝え方の簡潔さと、新しい知恵の提示は、名人芸的なものと言えよう。ふつう、人間はそれまで自分が考えていたことと異なったことを受け入れるためには、かなりの時間がかかる。今までの自分の考えと新しい考えとの関係を自分なりに整理して、新しい考えに納得できなければ受け入れられないのである。そういう点から見ても、U先生の指導は卓越しているといわざるを得ない。新しい考えを受け入れるためには時間がかかるのが普通なのであるが、それを一気にクリアーし、それ以上に大変な「そのとおりにやってみよう」という意欲を引き出しているのである。

新しい考えを理解してもらい、意欲を喚起させるためには、よほどの信頼関係が築かれていなければ不可能である。この名人芸的な指導が成立したのは、卓越した指導の仕方と、受ける側の要因の両方がそろっていたからと考えられる。

指導者の卓越したところは、Sさんを徹底的に受け入れているとSさんに感じさせたことである。ぎりぎりのところにいたSさんが感じるほどなのだから、生半可な理解、共感ではないと言える。そのときのSさんは、自分の人生だけを背負って苦しんでいるのではない。親の生活、家族の生活、そしてこ

れからの子供のこと、すべてを背負って苦しんでいたのである。その苦しみをわかってくれて、その上でなおかつとんでもないことを言い出しているのだ、そこに深い知恵があるのだとSさんは感じていたのだと思われる。それほど信頼感をU先生はこの短い指導の時間に獲得していたのである。それまでの関係から信頼関係がある程度できていたと考えても、このときに凝縮して一気に深い信頼関係を創り上げたことは間違いがないであろう。そういう点で、この指導はことばこそ少ないが、心のエネルギーのやり取りとしては莫大なものがあつたと想像できるのである。

また、その莫大なエネルギーと深い知恵を向けられたSさんが、それをしっかりと受け止めようとしたことも大変なことだと思われる。それまで、自分で散々考え、悩み、そして信頼する先輩たちに相談してもどうにもならなかった、という絶望を感じていたであろう。その経験から、U先生からのような指導を受けても、素直にそれに従おうという決意をしていたことは確かだ。それこそ、絶望の暗闇の中でやっと見つけた一筋の光と思いい、どのようになろうともこれにかけるしかないという最後の糧としていたことが、細かいことはわからなくてもU先生の言うことに従おうという固い決意に結びついたのだろう。しかし、そのような決意ができること、つまり人の言うことにまず従ってみようという素直さ、自分の考えにとらわれることから抜け出せる柔軟さ、潔さ、とりあえずやってみようという試行錯誤を恐れない勇氣、それらの資質が育まれていたことが大きな意味を持つていたと思われる。

それらの条件が重なり合ったときに、それこそ名人芸的な指導が可能になったのであろう。指導される立場の場合には、どんな指導であつてもそのとおりにやってみようという指導者への信頼感、自己責

任性、素直さをもって指導を受けることができているかをチェックする必要がある。

また、指導者としては、相手の運命をも引き受けるだけの責任感を感じながら深い共感ができているか、その共感を相手に伝えられているか、そして新しい深い知恵を提供できているかをチェックする必要があることが示していると思われる。

蛇足になるかもしれないが、一点補足しておきたい。今回の事例においてはSさんをU先生に導いた先輩たちにスポットを当てていないが、実はこのような隠れた支えがあるから劇的な指導が成り立つことを銘記しておかなければならない。今回の場合でも、Sさんの「かたくなさ」がもう少し早く緩んでいたら、先輩の指導がこのような劇的なものになっていたのかもしれない。指導というのは、その的確な判断、つまり、どの時期に、誰によって、どのようにして価値観の大逆転を起こせるかという判断こそが基本である。そして、時には今回のように他の指導者の力を借りることも必要であり、その柔軟な指導をできること自体が、先輩たちの「囚われ」の少ないことを示している。その先輩たちの真摯な姿に感化されて、Sさんの心の変化が容易になったということも十分に考えられるのである。

(七) 留意点——高尚な知恵の必要性

さて、最後に今回の事例から学ぶ限界についてふれておこう。少しふれてはいるが、この事例と似ているからといって、同じことはできないことがある。微妙に条件が違うのが当然であり、全く同じ事例というのはないと考えなくてはならない。そのため、新たな事例に遭遇したときに、似た前例のどこを

参考にするのかという選びが必要なのである。それが新しい知恵を創造する源でもある。

具体的に特に注意しなくては行けないこととして、次の三点が挙げられよう。

① 最高道徳で対処するかどうかの判断

② 普通道徳で対処する場合の方法……調停するのか、それともその前段階として対決させる必要があるのか

③ 「相手の良いように」……自先の良きなのか、それとも将来的展望における相手にとってのよきなのか

①の最高道徳で対処するかどうかの判断というのは、広池博士も述べているように、あまりに不正義な相手との場合には、心では相手の幸せを願いながら行動としては法的な手段も考えなくてはならないということである。今回のSさんの場合には、社会的不正義ではないし、兄弟という、できれば今後の関係を良好なものとして築いていきたいという条件であった。相手を生かすことによって、結果として自分も生きるといふ典型的な結果をもたらすことができたのは、Sさんを取りまく環境の面からも、つまり義兄の立場からも考察する必要があると考えられる。何しろ、二十五年間も献身的に働き、後半の十一年間は治療院の中心となって、Sさんの父親に代わり、Sさんを支え、育ててきた人である。実質的に治療院を受け継いできたのは義兄なのであるから、その看板を持っていくというシナリオが起きなかつたことが不思議だとも言えよう。かわいい義弟のためにどれだけの愛情を持って犠牲的な努力を積

み重ねてきていることか、そして多くを求めない誠実な人柄であることが今回の事例の裏側にはうかがえるのではなからうか。その人間性については、独立後にも地域の人々からも信頼を寄せられ、Sさんの前に学校のPTA会長を勤めていたことから想像できよう。

②の方法については、どういう形で深い知恵が示されるかということである。大岡越前の裁きに「三方一両の損」というのがある。三両を落とした人、それを拾って届けた人、どちらもそのお金を受け取ろうとしない。そのときに大岡越前がいたく二人の気持ちに感動し、大岡が一両だし、二人に二両ずつ受け取らせ、三人が一両ずつ損をした感情になるとい裁きをしたという話である。これは、調停であるが、見事に「三方良し」を実現したものといえるのかもしれない。いずれにしろ、調停によっても十分に「三方良し」の実現ができることもあるわけで、そのとき場合に依じて、幅広い観点から深い知恵を創造していく必要があるだろう。

③は、深い知恵を創造していくときの視点についてである。たいてい、私たちは当面の解決を考える。将来的な展望が十分にできないということもあるのかもしれない。確かに、将来的なことをばかり考えて、現在に犠牲を強いていたら、犠牲を強いられている側は不満が募っていくことであろう。そういう点では、相手がどこまで理解するのか、相手の視点がどこにあるのかという条件も踏まえてのことであるが、こちらもどの程度までの将来的な展望を見定めるかという難しさがある。目先は良かったが、そのためにその後は不幸になったというのでは、最高道徳的な行動とは言えないであろう。現在だけではなく、将来的な視点をどの程度含めた知恵を提供するかという判断を迫られていると考える。そして、その前

に将来的な展望をこちらがどれだけ持てるのかということも問われているのである。そのために、まず第一に必要なのは、時代の趨勢、社会の状況、世界の状況をつねに認識した上で自分の人生を作り上げることはないだろうか。自分の人生を創造的に展開させているからこそ、他の人との関係において、相手の良いように考えることが可能になると思われる。